

《特別講演》

《バルザックを読む会》のことなど

山田 稔

《バルザックを読む会》が正式に発足したのは一九五六年十月のことであるが、そこへ至るまでには、生島遼一先生のわたしたちにたいするねばりづよい勧誘と説得があつた。

そのころ、わたしたちは二十代後半で、まだ定職がなく、独身で、ひまと若さを持てあましていた。当時は仏文に来るのは多少とも文学青年タイプの人間で、連日のように集まっては酒を飲み、くだまくといった生活だった。一方、それはまた知的沸騰の時代でもあり、京都だけにかぎっても、さまざまな会が生まれていた。京大人文科学研究所での、桑原武夫先生を中心とする共同研究が大きな刺激であつたことは否定できない。わたしが参加していた会だけをとってみても、《バルザックを読む会》のほかには、《日本映画を見る会》、《日本小説を読む会》、《ぬーぼーの会》(二十世紀小説を読む会)、《中国小説を読む会》、すこし離れてはいるが、神戸の同人誌《VIKING》、またこれはわたしは加っていないが、たが、やはり同人誌《ARRURU》などがあり、それらのメンバーは一部重なりつつ交流し、刺激しあっていたのだつた。まったく「会の時代」といってもよい。

わたしたち若いものの怠慢を憂い、かつまた「話相手をこしら

えよう」という「下心」から、『人間喜劇』を読む会を生島先生は思いつかれたらしい。「バルザックは一人で読んでもおもしろくない」のである。

卒業論文にバルザックを選んだ田村倅に事務局長の白羽の矢が立ったのは当然であるが、喜んで馳せ参ずる者がいない。みんな何だかだといつて、バルザックから逃げようとする。「テンポがのろい」、「書き出しのゴタゴタしているところはとばして読んでいか」、「常識的である」、「女の描き方がまずい」等々。それにたいし生島先生は、こう反駁された。「省略してよんだらだめ」、「バルザックは女性心理研究の大家である」、「テンポのおそいのは横綱相撲の風格」。

こうして、怠けよう怠けようとするわたしたちひとりひとりの首根っこを押えるようにして、十数名の会員を先生は集められ、一九五六年十月、会は発足した。当時先生は五十一歳、わたしは二十六歳であつた。

会が四年ちかく続いた一九六〇年六月に、会報「バルザックを読む会」第一号が出た。タイプ印刷で六頁。そのいわば巻頭にかげられた生島先生の「《バルザックを読む会》のこと」から引用

する。

「四年前の夏、数人と集まったとき、この〈読む会〉を発案した。その秋からはじめて毎月一回の読書会がたい休まずにつづいている。現在は学生時代から特にこの作家を研究してきたヴェテラン数人も参加して会に若干の〈権威〉をそえている。多数はしかし、私と同様、アマチュアで出発した読者のあつまりであることがこの会の一特色だ。四年近くつづけたことでいくらかかわれわれも成長したらしい。コレット女史だと思いが、バルザックは「首までつかって読者にならねば」といった。まだ首まではいかぬが、膝のへんまでは水がきたような感じである。今秋あたりから、懸案であるも少し研究会らしきやり方もみんながぼつぼつ考えてくれるだろう。同時に今までの素人らしい自由さと幸福をもちつづけたものである。」

ここでいう「この作家を研究してきたヴェテラン数人」というのは、道宗照夫、中恒恒朗、原政夫氏ら、わたしの先輩の方々をさす。当初は、田村をのぞき新制第一・二回卒業の〈素人〉ばかりでスタートしたのだった。

会報第一号（一九六〇年六月）にのっている名簿によって、會員の氏名を挙げておく。

生島遼一、生田耕作、黒田憲治、桑原武夫、沢田閏、島田尚一、杉本秀太郎、鈴木昭一郎、多田道太郎、竹岡敬温、田村俣、中堂恒朗、鳴岩宗三、原政夫、藤本貢、道宗照夫、山田稔、以上十七名。

これ以外にも初期には中川久定、飛鳥井雅道らが出席し、一度

ずつ報告をおこなっている。会報の出はじめたころ、西川長夫、祐子が夫婦で参加した。メンバーの何人かはスタンダールの研究者で、そのため生島先生に「つかまった」のである。スタンダールをやっている以上、バルザックはイヤとはいえたものではあるまい。

当時、ヴァレリーやアラランに熱中していた杉本秀太郎がどうしてか途中から紛れこみ、「ふくろう党」や「ガンバラ」について報告しているのも、なんだか妙だ。

わたしは五十回のうち六回報告した。Rabouillense, Gobseck, Colonel Chubert, Muse du departement, Ferragus, Double famille これでわかるように、わたしの好みはむしろ中篇の方にあった。とくに「シャベール大佐」は好きな作品で、会報第二号にはこれをふまえて「探偵について」と題する拙文を寄稿している。

そうはいうものの、わたしも最初はバルザックは苦手で、かなわん、かなわんとばやきつつも「精神のポデイービル」とあきらめ、毎度、京大教養部の生島先生の研究室からコナール版の全集を一冊ずつ借り出して読んだ。そのうち次第におもしろくなってきた。人物再現の手法のおかげで登場人物と馴染みができてくると、「バルザックはたくさん読まねば面白味はわからんな」などとえらそうな口をきく始末である。とても「首まで」は無理としても、「膝」よりはすこし上、まあ臍のあたりまではつかったろうか。

この約変ぶり(?)を、生田耕作さんはうさくさげにながめながら、「山田君、バルザックほんとおもしろいですかあ。ほか

はかなわんなあ」と苦笑いをうかべるのだった。

当時、教養部講師だった生田さんは、生島先生の誘いをことわりきれず、いわばお義理で会に出ているのだと思う。シュールレアリスム一辺倒の彼が、バルザック拒否反応度がいちばん高かったにちがいない。それでもはじめのころ *Lys dans la vallée*, *Splendeurs et Misères des courtisanes*, *Illusions perdues* の三長篇について報告している。

もう一人、これも先輩でバルザックに悲鳴をあげていたのが多田太郎さんである。当時、人文研の助手で、ジャーナリズムで活躍しはじめた多田さんに、もっとフランス文学を勉強させようという狙いが生島先生にはあったようだ。嫌えば嫌うほど追いかけたくなる、そんな心理がはたらくらしく、「多田君、ぼくのバルザック全集をあげるから」などと二次会でカワイがられた多田さんが、悪酔してゲゲエ吐く背中を、笑いを噛みころしなからさすったこともあった。それでも彼も三回報告している (*Cousin Pons*, *Illusions perdues*, 「バルザックの芸術論」)。

「バルザックを読む会」の会場は京大楽友会館二階の小室で、時間は午後六時半から九時ごろまでであった。出席者の数は最初は十名をこしていたと思うが、次第に減っていき、たとえば一九六一年十一月の「ソーの舞踏会」(沢田閏)のときは七名で、会報には(注記)としてつぎのように書かれている。

「出席者はすくなかった。バルザックの会は、ガマンの会。最もよくガマンするもの、最もよく征服するものなり。Adventureに

おいても、Scienceにおいても、これは真実であります(T)」このTは会報編集人・田村俣のイニシャルである。

たまたまこの日は欠席だったが、生島先生はほぼ毎回出て来られた。自宅の近くのお気入りのお菓子屋さんでケーキを買ってきて、ご馳走して下さった。討論は自由な雰囲気のうちにおこなわれた。文学論のあいまに、××男爵婦人と××公爵婦人とどちらが好きか、といった「俗な」話がはさまった。笑いが絶えなかった。笑わせ役は、主に沢田閏だった。

討論のおわりごろになると、みなそわそわしはじめる。「ほんとうに暑い」とある年の七月の会の模様を、田村が書いている。「楽友会館の風通しの悪い部屋が、うらめしい。早く二次会にいつて、ビール飲みたいと皆がひそかに考えていた。ジャバへ。」

この「ジャバ」というのは、四条通り、現在の祇園ホテルの西側の角にあった生島先生お気入りの喫茶店で、まずそこで一休みし、先生のお話をもう一度うかがった後、やっと「解放」されるという段取りなのであった。

こうして、何だかだといいながらも、わたしたちは次第にバルザックに馴染んでいき、「も少し研究会らしきやりかた」へと向かいはじめていたようだ。生島先生は大学でバルザックの三度目の講義を、「哲学研究」の諸篇を中心にされた。一九六二年三月発行の会報八号にのった「去年の収穫」という文章から引用する。

『「人間喜劇」は社会小説である。登場人物は社会的に把握されているという意味でみな社会的人間である。行動はつねに現実の社会の中に実現される。しかし、フランスの古典的な文学で研究

され描かれている人物が *social* だという意味では、バルザックの人物は *social* ではない。むしろ反社会的であり、あるいは、社会の中に位置しているというより、「自然」の中にいる。だから、自然的な反社会的なエネルギーの *dynamisme* を発揮する。いわゆる大型人物の「大きさ」もここにあると見たい。

こういう反社会的、アウトロー的人物たちの活動する『人間喜劇』世界がわれわれに一つの社会を、*solide* な社会を読みとらせる理由は、バルザックの描く社会がすでに古典的に安定した世界でなく、生成の世界であったこと——逆にいって、自然的なエネルギーによって生きる反社会的人物を多数登場させることによって激動する新しい社会を描きえたのではあるまいか。」

気運は次第に熟しつつあるかに見えた。前年（一九六一年）の五月には、京都会館を会場にして開催されたフランス文学会春期総会の二日目に、バルザック座談会を開き、河盛好藏、水野亮、安士正夫、井上究一郎氏らに参加して下さった。

わたし個人についてみれば、その間、「観察者の哲学——バルザックについて」という論文を書いている。この会のおかげで書いたのである。

だが怠慢の風はそう簡単に改まるものではない。業を煮やした生島先生から、ついにお叱りをうけたらしいのである。

「頂門の一針というべきか、年末の例会のあとI監督はチームのメンバー一同を説諭された。その真意はいづくにありやといふかるもの、面をふせながら過去の怠慢を反省するもの。やがて助監クラスの発言があり、一九六二年度のラインアップがきまった。

(1)多田、(2)田村、(3)西川(祐子)、(4)沢田、(5)生田、(6)道宗、(7)生島、(8)山田、(9)原、(10)藤本、(11)島田。これは背番号ではない。各数字は順番と担当の月を示している。」

会報8号の「編集後記」にはこう書かれている。

たしかに一九六二年は右の順番で報告がはじまった。ところが四月の「捨てられた女」(沢田潤)で、突然絶えているのだ。会報も8号から九カ月も間があいて、9号が出たのが十二月、そしてそれが結局は最終号となったのだ。会を解散する、会報を休刊にする、といったことはひとことも書かれてない。あまりの唐突さに、わたしは9号以降の会報を紛失したのではないかと疑ったが、そうでないことがわかった。

会はどうして突然、終焉をむかえたのか。そのあたりの事情の記憶がすっぱり抜け落ちている。その点を、後で田村徹にたずねてみたところ、「多忙」という何とも味けない返事がもどって来た。「そのころになると、皆忙しくなって、会に出席できなくなつた」と。

あきれたことである。当時わたしたちは三十代のはじめで、やっと職を得、結婚もできたころだったが、どんな「多忙」があったというのか。前年のおわりに、一年分の報告担当者の「ラインアップ」まで決まっているではないか。これではへバルザックを読む会へ頓死である。

やはりどうにも腑に落ちないので、後日、生島先生にたずねてみた。

先生のお返事はこうであった。あの会を終らせたのは自分であ

る。初期の情熱が失われマンネリ化したので解散した。「多忙」などが原因ではない。

肅然と襟を正す思いであった。一九六一年末の会での「説論」以来、二十七年ぶりに、もういちど叱られたようなものである。

忘れていたが、あのころすでに先生は、仲間うちのお喋りに墮していた会にすっかり愛想をつかしておられたのだ。翌年四月まで会はずづいたが、惰性にすぎなかったのである。一方、「多忙説」にかんしては、会の世話人であった田村徹が奈良女子大に就職したのがちょうどその年の四月であるから、彼個人としては、忙しくなったのは事実だろう、というのが生島先生の解釈である。

おそらく会の終焉の事情は、このとおりであろう。しかし、それとは別に、わたしにはわたしなりのこの会への思い入れがある。最後に、それをすこし書く。

以上見たように「ヘバルザックを読む会」は約六年続いて解散となった。当時は六年もよく続いたと思っていた。しかしいまでは短命という気がする。青春が短かったように、短かったと感じるのである。

だが客観的にみれば、やはりよく続いたというべきだろう。思えば不思議な会であった。普通は好きな者同士が集まるころを、この会では仕方なく参加させられたのである。かなわん、かなわんとこぼしながら六年間続いたのである。

それは何故だろう。ひとつには、はじめにも書いたように、知的沸騰の時代ということがあるだろう。「ヘバルザックを読む会」

は、それだけが孤立して存在したのではなかった。そのまわりには、すでに挙げたような性格のよく似た自由な会が——研究とも遊びともつかぬ会があつて、基本のところでも共鳴し、相互に支え合い、影響しあつていたので。

そしてなによりも楽しかった。バルザックを読むつらさを上まわる楽しさ。それはどこから湧いてきていたのだろうか。会に出て生島先生に会い、友人たちに会つて喋ることのよろこび。すくなくともわたしは、そのために毎月楽友会館に足を運んだ。わたしたちの大半は、学生時代ずっと先生の講義を聴いた「教之子」であつたが、その師弟の関係は、教室の中だけでなく、外でもつづいていたのでつた。会発足以前から、年に一度か二度、桑原先生もまじえて、わたしたちは夏に貴船に遊んだりして親交をふかめていた。そういう人間関係の上に、この会は成り立っていたのだつた。その友情をさらにはぐくみ、深めるために、「ヘバルザックの会」は存在した、と思いたい。

バルザックに頭を下げるのでなく、よし、そのうちこの横綱を倒してやるぞ、そんな若者の向うみずな態度で、わたしたちはぶつかつて行つた。その青春の情熱が会を持続させたのだとすれば、そのエネルギーは早や六年でつき、衰えたというのだろうか。

結局、会は九号までの薄っぺらな会報以外、なんら有形のものは残さなかつた。ふと、いま「生島説」とはべつに、こんな考えが頭を横切る。会員の一部に何かを残そう、研究論文集をこしらえようといった「野心」がきざしたため、会はずづれたのではあるまいか。

わたしたちは最後まで「素人らしい自由と幸福」を無邪気にも保ったまま、散って行った。しかし六年間、バルザックの胸を借りた効果はきつとも残っている。たとえば〈小説〉について考えるとき、バルザック、あるいはアンチ・バルザックがたしかな手ざわりとともにわたしにはある。

あの時代をのがしては、『人間喜劇』を読みとおす機会は終生なかっただろう。われながらよくやったと思う。独力で読んだのではない。会が、会の友情が力を貸してくれたのだ。ありがたいことだと、三十年経ったいまにして思う。

(京都大学教養部教授)

(以上は一九八八年五月十四日、京都大学フランス語学フランス文学研究会第四回総会での特別講演の内容を整理、補足したものである)。